銀と砂糖の「南蛮貿易」？
〜500年前の世界と日本〜

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 笹川 裕史

はじめに
本稿は、銀および砂糖と日本とのかかわりを切り口とした授業案（1時間）である。大航海時代といえども、「探検」に注目しがちな生徒に、世界の一体化を具体的に考察するモノ（視点）を与え、授業は、生徒への発問を軸に組み立てた。

銀が結ぶ世界

導入
沈黙は金、雄弁は銀」の意味は？
雄弁は大事だが、黙るべきときを知ることもっと重要」という意味である。いまだほどなく「沈黙」を、銀よりも高価な金にたとえている。
だが16世紀以前の世界では、銀は金よりも希少価値があった。砂金などの形態で自然でも存在していた金と比べて、自然銀はきわめて少なく、また銀鉱石の製鍊法が未発達だったためである。
ヨーロッパの銀不足を劇的に「改善」したのが、1545年のアンデス山中のポトシ銀山発見であった。ポトシでは、やがて水銀を触媒として用いるアルカゲ法が精錬法として採用され、16世紀末には銀の生産量が7倍近くのものという。
スペインの銀船団がヨーロッパに運んだアメリカ産の銀は、17世紀には、毎年200〜300t以上とされている。そして、その銀の大半が最終的にはインド・中国にまで運ばれた（17世紀を通じて約1万6000tと考えられている）。

展開
16世紀の倭図と南蛮貿易の共通点を問う。
共通点は、日明間の銀貿易である。後期倭図は、明の海禁に抵抗した密貿易集団で、東シナ海周辺のさまざまな地域の人々からなっていた。彼らは、中国東南沿岸部を略奪する一方で、中国で需要が高まっていた銀を密輸したのである。
石見銀山は、1533年に灰吹吹法が朝鮮より導入されたのが、銀の産出量が大幅に増大していた。17世紀の日本の銀の産出量は年平均約200t （その約2割が石見産）で、1160〜1460年の中国への輸出量は約9450tだったという。「明解 世界史A」（以下、教科書）p.90〜91は石見銀山を扱っているなので、地図や絵画などの資料とともに、当時の世界経済における石見銀の影響をとらえさせたい。
南蛮貿易は、ヨーロッパとアジア（日本）を直接に結ぶ長距離交易というイメージが強い。しかし大半は、ヨーロッパ船によるアジア間交易であった。1557年にマカオの居留権を明から獲得していたボルトガルは、71年に長崎港が開かれたと、長崎－マカオ間の貿易を進めた。倭図が警戒する明を横目に、ボルトガルは中国生糸と日本銀との交易で巨利を得たのである。

（図1）1600年前後の1年間の銀の移動（D・フリン（秋田茂・西村雄志編）『グローバル化と銀』より作成）

「グローバル化は1571年に始まった」という説がある。1571年に何が起こったのか？
1571年、スペインがフィリピンにマニラを建設
し、メキシコのアカラブコとの間で貿易が始まっ
た。アメリカの歴史家D・フリンは、この出来事を
画期としている。従来のアフリカをふくむユーラ
シア間での長距離貿易に、アメリカと東アジアを
直接に結ぶ航路が加わり、まさに地球を一周する
ネットワークが形成されたからである。

なお、アカプルコ・マニラ間のガレオン船貿易
によって、アメリカ産の銀が年間約130 t輸出さ
れたという。17世紀を通じて1万3000 tの銀がマ
ニラ経由でアジアに流れと推計されている。

中国が「競いのブロックホール」となった理由は？
明は、15世紀後半に大量の軍隊を北辺に配置し
た。当初は穀物などのかさばる現物を前線に運搬
していたが、だしいに高価でかさばらない銀を税
として取り立て、北方に近い軍事物資を買いつけ
るシステムに移行した（明朝が、財政問題から紙
幣を乱発した結果、紙幣制度が破綻し、商人は銀
を決済に用いていた）。こうして内地に残る銀が
減少したにもかかわらず、税や地税の銀納化が進
んだため銀の需要が高まったのである（教科書
p.91「3.中国に集まる世界の銀」）。

ヨーロッパ人はアジアの香料・紬・陶磁器を熱
望していた。そして銀がその対価となった。中国
における銀の市場価格が、他の地域よりも高か
かったからである。中国で金銀交換比率が1対6
だった16世紀初め、ヨーロッパでは1対12、ペル
シアでは1対10、インドでは1対8だった。銀が
中国に長期間、流入したのは当然であった。

なお中国に流入した銀の大半は軍人や官僚、特
権商人の収入となり、一般民衆は重税に苦しんで
いた。銀の流入は、必ずしも中国社会全体の豊か
さや生活の安定を約束するものではなかった。

「円」「元」「ウォン」という通貨単位の由来は？
16世紀以降に、スペインがアメリカ大陸で鋳造
した「8レアル銀貨」は、重さ（26g強）も純度
（93％）も一定の良質であり、大量に鋳造された
ので当時の代表的な国際通貨となった。

東アジアでは、銀は秤量貨幣として流通し、中
国では両、日本では文といった重量単位が用いら
れていた。中国でも、当初「8レアル銀貨」は鋳
造され、馬蹄銀とされていたが、清代の中期以降
は、硬貨の形が主に使用された。そしてその数え
方を円銀貨の形から「円」あるいは同じ発音の「元」
が用いられた。近代的貨幣制度が整備された19世
紀後半に、東アジア各国で「元」に由来する単位
（「ウォン」も「円」の朝鮮語読み）が採用された
のは、このような理由による。

（図2）

3 白金生活

《導入》
砂糖を最初に口にしたヨーロッパ人は、誰？
東南アジア原産のサトウキビは、インドで栽培
されるようになった。ヨーロッパ人で最初に砂糖
を知ったのは、アレクサンドロス大王の部下だっ
た。「インドでは蜂の助けを借りずに、茶の茎か
ら蜜をつくっている」と報告している。それ以前
に人類が知っていた甘味料は、蜜であった。

《展開》
ヨーロッパ人は、どこから砂糖を入手したか？
8世紀中ごろ以降、イスラームの大交易圈が形
成されると、ムスリムは砂糖だけでなく、サトウ
キビ栽培と砂糖生産を各地に広げた。そして12
世紀ごろには、コロニアやナツメグと同様に、ア
ジア産香料として砂糖がヨーロッパに紹介されて
いた。スコラ哲学者のトマス=アキーナは、ア
ラビア医学の影響を受け、消化薬として持つ ging。
ヨーロッパでの需要の大半が、まかなわれた。17世紀になるとオランダ・イギリス・フランスが新大陸・西インド諸島でプランテーション経営を始めた。こうして生産量が激増した砂糖は、奢侈品から生活必需品へと変化していった。イギリス人も1人あたりの砂糖消費量は1600年には400〜500gだったが、17世紀には2kg、18世紀には7kgと増え、砂糖は庶民にも手の届くものとなったのである。

日本の「シュガーロード」とは、どこだろう？
近年、長崎街道（小倉〜長崎）を地元では「シュガーロード」とよんでいる。戦国時代後半、長崎には南蛮船が来航した。ポルトガル・スペインは、レコンキスタでムスリムを追放したが、砂糖をふんだんに使ったイスラーム教の伝統は受けついでいた（カステラや金平糖などの南蛮菓子も、その流れをくんでいる）。また来日するオランダ船は、砂糖をバラスト（重し）としていた。銀を大量に産出していた当時の日本は、その経済力によって砂糖を輸入し、江戸時代には、砂糖を使ったり、蒸し菓子の発達がもたらされたのである。
江戸時代の初め、中国の福建省から黒砂糖の製法が伝えている。しかし高価な精製技術を要した白砂糖は輸入品にたよりなければならなかった。この結果、平戸商館の時代に年間100tだった砂糖が、18世紀には年間500〜1000tとなり、唐船による輸入と合わせると1500〜2000tとなった。
こうして出島における砂糖1kgの価格が、19世紀初めには、現在の価格で1150円程度に値下がりしたという。なお当時の輸入砂糖の3分の1が薬草の材料に用いられており、残りの3分の2は、むしろ薬草など口にできない貧しい人々が、米やうどんにつけて中腹を凌いでいたという。

4 整理

日本の鎖国が「可能」であった理由は？
鎖国は幕府による管理のためであった。銀の流出現が激しくなると、1660年後半に幕府は、その輸出を抑制している。また桐花・生糸・茶など、当時のヨーロッパ諸国が求めたものを、日本は基本的には自給（国産化）できた。砂糖も必要最低限の量を輸入していたが、のちには琉球および国内で生産を始めている。この点は、貿易赤字を解決するために、相手国を侵略し、植民地にしていった西欧諸国との大きな相違でもあった。

5 おわりに

本稿では、銀および砂糖の、どちらかといえば、華やかな光の部分に焦点を当ててきた。だが、もちろん、忘ましい影の部分をみのがしてはならない。鉱山やプランテーションでの強制労働である。新世界の先住民が「全滅」したあと、アフリカの黒人が、労働力として補充され続けた。
とくに砂糖プランテーションは、綿花・コーヒー・プランテーションと比べ、面積で2倍、労働力で6倍、家畜で2倍という大規模なものであった。サトウキビの伐採・粉粹・搾汁・煮つめなどの過程で、短期間の集中労働を要したからである。まさに「砂糖のあるところに奴隷あり」。先進国」の甘い生活は、黒人奴隷の血と汗によって成り立っていたのである。

【参考文献】
岸本美緒『東アジアの「近世」』（世界史リブレット）1998年、山川出版社
D・フライ（秋田茂・西村雄志編）『グローバル化と銀』（2010年、山川出版社）
川北께서『砂糖の世界史』（1996年、岩波書店）
宮崎正勝『知っておきたい「食」の世界史』（2006年、角川学芸出版）
八百啓介『砂糖の通った道——薬草から見た社会史』（2011年、弦書房）